

いつもはオーケストラの演奏でもしているだろうステージの上に、2人の選手がこちらに向かって座っている。向かって左側には、絶対王者の金屋。そして右側には挑戦者の堀口。一人がひとつの長机に座り、「そのとき」を待っている。金屋は机上の中央の一点を見つめて集中を高めているようだ。対して堀口は、ほんのりと笑みを浮かべたかと思うと即座にキュッと歯を喰いしばったように見えた。自分自身を鼓舞しているのだろうか。

この雰囲気である。誰も何も言わずとも、ステージ上のみならず観客席も含めた会場全体が静寂に包まれていた。

机上には、それぞれの選手の「鉛筆」以外まだ何も置かれていない。いや、こちらから見て左側にデジタル表示されたストップウォッチが置かれており「00.00」と表示されている。そしてその奥……選手からすると右側ということになるのだが、赤い「ボタン」が置かれている。

そう、クイズ番組などで見かける「早押しボタン」だ。

それぞれの選手の背後には、1人ずつ担当者が立っていた。そして競技委員の — スピーカーからの「用紙を配布してください」の声に続いて、静かに1枚の「紙」がそれぞれの机上に置かれた。

「ねえ、先生？ 問題って6問でしたっけ？」

隣にいる先生にコソコソと聞いてみた。先生はこちらを見て、声を出さず首を縦に振ることにより返事をした。あれ、もしかしたら少し怒られたかな？ 表情は怒っやようには見えなかったが、もしかすると、と思った。私も静かにしてなくっちゃ！

前種目の敗者である堀口が選んだ種目は、わり暗算だった。暗算種目はタイムに差が出ずらいので、彼女にとっては最も勝つ可能性が高い種目だと考えたのかも知れない。事実、堀口は2種目めのかけ暗算で1勝しており、ここまで彼女の1勝2敗だった。

間もなくして、会場から競技開始を伝える「声」が聞こえて来た。

「わり暗算。問題は6問。制限時間は12秒です」

そして、1, 2秒間の静寂。

「用意、始めっ！」

競技委員の高らかな、そしてかなり早口な宣言とともに、2人の選手が机の下に置いてあった両腕を瞬間的に机の上に上げ、右手で鉛筆を持ち、左手で問題用紙を瞬間的に表に返し、その直後から鉛筆が紙の上を踊り始めた。

私は「いったい、何秒で終わるんだろう」と心の中でわくわくしながら考えていた……いや、正確には「最後まで言い終えることはできなかった」。「いったい、何秒で、おわ……」

「はいっ！」

2人の選手がほぼ同時に、右手で早押しボタンを思いきり「ドン！」と叩きながら大きな声を上げたのだ。

「うおえっ!？」

私が思わず上げた声は、何語かすらわからない聞かれたら恥ずかしいものだった。同時に、驚きの余り右腕で先生の左腕をど突いてしまったかも知れないと思った。ごめんなさい、と心の中で謝ると同時に、会場から起こっていたかなり大きめのどよめきも聞こえてきた。

ここにいる全員が、驚くような結果だったのだ。

見た目や選手の声だけでは、どちらの挙手が先だったかなんてさっぱりわからない。デジタルタイマーに目をやると、驚愕の数字が目飛び込んできた。

向かって左側の表示は「4.32」

右側の表示は「4.33」

何と100分の1秒の差だった。1問につき1秒も掛かっていないという事実にも驚いた。私としたことが、この時ばかりは身体を動かすことができなかった。それどころか、何と言って良いのか、どのような感想を持てば良いのか、さっぱりわからず、声を出すことすらできなかった。そのまま信じられない思いでこのステージ上を見つめるばかりだった。

100分の1秒……私は果たして、そんなこと意識して「そろばん」に向かったことなどあるだろうか？ 私だって一応、段位も取得している。地元の大大会にも毎回出場している。スピードもさることながら正確さ優先の検定練習に対し、私にとっては全問できることなどない圧倒的問題量の大会練習。1秒でも速く計算して1問でも多く計算したい一心で取り組んできた。大会に出ると、全問できる選手もいたし、つまりそろばんの「すごい」人も見てきたつも

りだった……そう、この大会の見学に連れてきてくれたこの先生も私からすると「すごい」人だ。検定では十段に合格していた。地元の大会では優勝もしていた。それでも、それでもなお、この目の前の世界は「すごい」という表現もしようがない世界に見えた……どのような練習をしてきたらこのようなレベルになるのか、想像することすらできないのだ。自分が1日24時間練習したら、いつかはこのようになれるのだろうか？ いや、絶対になれっこないということは即答できた。一体、何がどうなっているのか……

ちらっと先生の方を見てみた。先生もこちらをちらっと見たような気がしたのだが、すぐにステージ上に目を戻した。いや、ずっとステージ上を見ていたのかも知れない。この先生は「上には上がいるんだぞ」と言っていた。私を10とすると、先生は20か25くらいだろうか。私の倍以上は「速い」し正確だ。「上には上が」って、10の上には20が、20の上には30がある、くらいの意味だと思っていた。でも……

私もステージ上に目を戻した……が、正直言って、さき程のわり暗算以降、心が「ここ」には存在しない状態だったのだろう、ステージ上での出来事は殆ど覚えていない。30や40の次に、1万という世界があるような感覚……そんな感じだろうか。余りにも世界が「飛びすぎている」。人間の想像力を超えている、と感じた。

学校やそろばん塾に帰って、一緒にそろばんをやっている友人に今回のことを話しても、誰も理解も想像もできないのではないか。そう、感じた。

そんなことを心の中で考えていると、いつの間にか5種目めも終了し、金屋の4勝1敗で名人位6連覇が決定していた。名人戦は2年に一度なので、これで12年連続の名人位が保証されたことになる。

主催者に「優勝した感想は？」とその場でマイクを向けられると、金屋の両目からは大粒の涙が流れ出てきた。男の涙だ。

その姿は、プロスポーツ選手のそれと、とても似ているような気がした。